

「授業評価を受けての改善の成果」

学校教育講座 教育心理学教室 江上園子

＜授業の目的：シラバスより＞

現代の学校で子どもたちと教師および大人達が抱える知的、情緒的、社会的な課題を学校心理学の視点から捉え、実践的・臨床的な教育・発達の支援を行ううえで有益な問題理解、援助の視点について学ぶ。子どもの学校生活と教育に関わる種々の立場の自発性と連携について、チーム援助、コーディネーション、コンサルテーションという視点の理解を深める。また、学習指導領域と生活指導領域などの絡みについても考える。また、現職教員の事例をもとに、各自がこれまで学んできたことをもとに、討論を行えるようにする。

＜授業の到達目標：シラバスより＞

1. 学校心理学の特徴とその目的について説明できる。2. 学校心理学を具体的に実践する際の心理教育的援助サービスや、各種の活動（カウンセリング、コンサルテーション、アセスメント）について概要を理解できる。3. 種々の実践事例に触れ、自分なりの学校現場での支援についてプランを描ける。

＜授業の概要＞

本授業は、全15回の授業であった。受講者は7名である（修士課程1回生が4名；うち現職教員の院生が2名、2回生が3名）。講義形式の授業がほとんどであったが、うち一回は外部講師を招き、その他二回は、現職教員である受講者に学校現場で取り組んだ事例についての発表を依頼した。また、演習形式のものを3回取り入れた。

なお、本授業は、平成22年度に設けられた科目であり、その年度の終わりに授業評価を行っている。その結果から得られた求められる改善点は、①スライドを視聴させるだけではなく資

料として用意する、②演習の回数を増やす、③理解度の促進のために初学者向きのわかりやすい講義を心がける、の3点であった。

今年度はこれらの3点すべてを改善点として盛り込み、授業を構成・進行していった。また、受講者の希望として、教授者の専門に近く、教育現場での必要性や学問としての発展性が大きい「アタッチメント（愛着）」にかかわる話をして欲しいとの希望が多数あったため、その講義も行った。

＜授業評価アンケートの結果について＞

最終試験の終了後、無記名式で授業評価アンケートを行った。質問事項とそれらについての回答内容は下記の通りである。

1. 「この授業を受講して良かったと思えましたか。5件法（まったく思わない～とても思う）で答え、その理由も書いて下さい。」

この質問では、全員が5（とても思う）という結果であった。理由としては、「愛着についての勉強が詳しく、本当に勉強になった。」「事例検討があり、考える活動が多かった。」「学校現場における幅広い心理的分野の学習が可能であり、現場に即して行われていたから。」「アタッチメントや子どもの感情理解については私の専攻（特別支援教育）ではあまり扱われることが無く、見識を深めることができた。」「SGEや演習のワークを、知識をもとにして行うことができたことが良かった」などであった。

2. 「この授業の内容をどの程度理解できましたか。5件法（まったくできなかつた～かなりできた）で答え、その理由も書いて下さい。」

この質問では、全員が4（まあできた）という結果であった。理由としては、「資料があったこと、また参考文献も明記して下さい、授業内で

理解しきれなかった内容を空き時間に学ぶことができることにつながったから。」「基本的な内容が多く、ほとんどの内容は理解できた。」や、「すべて理解しきれではないが、考える活動が多かったため、頭に残りやすかった。」「振り返って内容を見てみると、身についた部分と忘れてしまった部分があるから。」「毎回、なるほどな、と思えるポイントがありましたが、それが自分自身の力量的なものもあり、私自身の知識としてどれだけ生かされるのか、まだ不十分な気がします。」というものであった。

3. 「この授業を受けて、意味があった（役に立った）点はどの程度ありますか。5件法（まったくなかった～かなりあった）で答え、どういう点に意味があったか（役に立ったか）、具体的に書いて下さい。」

この質問では、4（まああった）：2名、5（かなりあった）：5名という結果であった。具体例としては「心理学の分野は個人的にあまり勉強していなかったのですべてが新しい勉強で新鮮でした。」「毎週の課題や現場の話、学外の先生の話がとくに印象に残り、勉強になりました。」や、「自分が詳しく知らなかった愛着について、勉強できた。この知識は今後も必要だと思う。」「授業の雰囲気もよく、教授・ワーク・事例発表など豊かな内容で、いろいろな場面を身近に感じられる学びになったと思います。」など書かれていた。

4. 「この授業で改善すべきところはどの程度ありますか。5件法（ほとんどない～かなりある）で答え、どこを改善した方がいいか、書いて下さい。」

この質問では、1（ほとんどない）：5名、3（どちらともいえない）：1名、4（少しある）：1名という結果であった。改善点としては「この講義内容が前期に行われているとよいと思う。そして後期に具体的手法を学ぶ講義があれば、より実践に結びつくから。」「スライドショーをテレビモニターで映すので、少し画面が小さいことと、レジュメの白とグレーのコントラスト

があまりなく、白字が見えにくかったことがあった。」という意見があった。一方で、「少人数でわきあいあいとした良い講義でした。」「まだまだ学びたいくらいです。ありがとうございました。」という感想もあった。

＜今年度の成果と課題＞

本授業は平成22年度に「院生とともに授業を創っていく」という狙いのもと構成されたものであり、本年度はその評価を受けての改善を行っていった。平成22年度に好評であった演習を1回増やし、学外講師を招き、さらには教授者の専門にかかわる話も取り入れた。また、反省点として、スライドを印刷した資料を配布し、よりわかりやすい授業を行えるように努めた。

その結果として、平成22年度と比較して、授業評価はすべての項目でかなりの高得点を得ることができた。同じ授業でも、可能な限りの改善を試み、受講者の希望を多く取り入れることで、院生に評価される良い授業ができたことが今年度の大きな成果である。

課題としては、モニターや資料の見やすさにもっと配慮するという点がまず挙げられる。また、アンケートを行ってわかったこととして、院生は本授業を受講する際、他の授業との重なりや関連などを想定以上に意識している。そのため次年度は本授業を行う際、他の授業でどのようなことが行われているのか、等も教授者が最低限押さえておく必要がある。そのうえで授業を構成・進行していくと、院生の理解度の促進や知識の定着の面でより有効であると考えられよう。 1